

論文

ニコライ・レスコフ 『怪物』 論

——交換様式の観点から——

Анализ рассказа Н.С. Лескова "Пугало" с точки зрения способов обмена

キーワード：ニコライ・レスコフ, 『怪物』, 交換様式, キリスト教, 「純粹贈与」

Ключевые слова: *Н.С. Лесков, "Пугало", способы обмена, Христианство, "чистый дар"*

深瀧 雄太 FUKATAKI Yuta

京都大学文学研究科修士課程

Abstract

Целью данного исследования является анализ рассказа Н.С. Лескова (1831-1895) "Пугало" (1886) с точки зрения такого понятия, как "способов обмена". Это понятие, которое японский литературный критик Кодзин Каратани (1941-) ввел для анализа общественно-экономической формации мировой истории. Каратани различает четыре способа обмена: (А) взаимобмен дарами, (В) грабеж и перераспределение, (С) обмен товарами, (D) будущий способ обмена на основе возобновления способа А, но на более высоком уровне. Эти понятия могут быть использованы в том числе для анализа поступков героев литературных произведений.

В результате анализа мы выяснили, что данные способы обмена не объясняют всех поступков главного героя Селивана, которого исследователи часто считают праведником, поскольку для его поступков характерна бескорыстная помощь. Такие поступки приблизительно совпадают с понятием "чистый дар", который проповедовался, по мнению Каратани, универсальной религией (не мировой религией).

Не случайно, что у Селивана наблюдаются зачатки чистого дара. С середины 1870-х годов Н.С. Лесков стал обращать внимание на базу Христианства (т.е. учение Иисуса перед установлением доктрин и ритуалов). С тех пор он часто писал художественно-литературные образы как воплощение сути этой религии. К ним мы можем отнести и героя "Пугала" Селиван.

1: 序論

ニコライ・レスコフ (Николай Семенович Лесков, 1831-1895) は十九世紀ロシアの代表的な作家である。一般に、この作家の特徴として「多彩な言葉」の使用(教会スラブ語, 民衆語, 造語等) や「語り」の手法, 「聖者伝」の再話, あるいは肯定的な人物「義人」(праведник) の形象化などが知られている。従来の研究は、これらの内実を個々に解明しようとするものだった。だが反面、レスコフの創作の全体像が十分明らかになったかという点、おそらくそうではない。

この現状に対して著者は、「贈与」という観点を導入することで包括的なレスコフ論を構築できると考えている¹。そのための実践的の第一歩として、本稿では、1) 短編『怪物』(“Пугало”, 1885) の作品分析を行い、2) 作品分析を受けて、『怪物』の文学的形象が作家の価値観(特に宗教観)と連動する形で現れている可能性を指摘したい。

1-1: 先行研究: 「贈与」の観点を含むレスコフ論その他

「贈与」の観点からレスコフを論じた研究は、Старыгина (2017) を除いて、ほとんど無い。彼女は、レスコフのクリスマス物語²において「贈り物」のモチーフ(мотив «дарения»)が一貫して存在していることを、具体例を通じて指摘している。

ところで、スタルイギナの分析対象に含まれている短編『怪物』に対しては、「義人」を描いた作品と位置付ける研究も多い。義人という概念は、必ずしも明確な定義が為されているわけではなく、最大公約数的には「肯定的な人物像」を意味する。その一方、義人の具体的な特質として、「献身性」や「自己犠牲性」を指摘した研究者もいる。Горячкина (1981: 26) は、義人について、「同情する人間ではなく、自らを他者に対してその終りまで捧げる闘士(борцы, отдающие себя людям до конца)である」と述べ、Столярова (1978: 188-189) は「自己犠牲的な援助(самоотверженная помощь)を行う」形象としてこれを論じている。

1-2: 本稿の視座

Старыгина 論文は、「贈り物」として「何」が描かれているのかを分析したものであ

1 「贈与」の意味については続く本論の中で述べるが、差し当たり「無償で物を与えること」という意味でこの語を使用する。

2 レスコフは、1880年頃から1885年にかけて、「クリスマス」が作中の時空間として用いられるような作品を複数発表した。さらに1886年には、発表済みの作品から十二作品を選定し、「クリスマス物語」シリーズ(Цикл «святочные рассказы»)と題する一巻本も出版した。

本稿で分析の対象とする短編『怪物』は、この一巻本には含まれていないが、研究者の間ではクリスマス物語に属する一作品と見なされることが多い。実際、Старыгина 論文において、『怪物』がクリスマス物語の系列に属することは前提となっている。本稿著者も、Старыгина たちと同様の立場を取る。

る。例えば『怪物』については、「刑吏と娘に施しを与える者も時にはいたが、当然彼らのためではなくて、キリストのためなのである。しかしそれでも、家には決してあげなかった Милостыню палачу с дочерью иногда подавали, не для них, конечно, а Христа ради, но в дом никуда не пускали (Лесков 1958a: 11)」（作中第3章）を取り上げ、これを「施し милостыня」という「贈り物」モチーフに位置づけている(Старыгина 2017: 53)。

ところで、この「娘」はその後、主人公セリヴァンにより妻として引き取られ、終生保護されている。Старыгина の観点から言えば、セリヴァンの行為もまたある種の「施し」の表れということになるかもしれない。「施し」という範疇で括るとき、二つの場面の差異はほとんど無くなる。では、彼らを「施し」を与える人物として、同一の範疇の中で論じて良いのだろうか。

おそらくそうではない。『怪物』の主人公セリヴァンは、先行研究の指摘の通り「義人」という肯定的な人物像であり、ゆえに他の作中人物とは原則的に区別されるものだからだ。その意味で、「義人」セリヴァンとその他人物を分かつ指標は、おそらく存在する。ただそれは、「何」を贈与するかという観点に留まる限り見出しづらいものなのだ。

発想を変えよう。ここで注目すべきは、「何」を贈与するかではなく、「いかに／なにゆえ」贈与するか、すなわち作中人物の行動様式、行動原理の方なのだ。この観点から、本稿では『怪物』を例に、作中人物の行動様式を分析し、主要人物セリヴァンとその他人物の間にはいかなる差異があるのかを考察してみたい。その際、柄谷行人の交換様式論を参照することで、両者の差異をより明確に示すことが可能になるとと思われる。

1-3: 柄谷行人の交換様式論

柄谷は『世界史の構造』(2015: 8-12)の中で、世界史上の社会構成体を記述するために、四つの交換様式AからDを指定した。それは、(A) 互酬、(B) 略取と再配分、(C) 商品交換、(D) 交換様式Aの互酬を高次元で回復させたもの、である。柄谷は、このうち交換AからCまでの三つの様式が、それぞれ氏族社会、帝国／国家、資本主義制度という社会構成体において支配的(ドミナント)であると述べる³。

また柄谷は、グローバル資本主義社会が交換様式A、B、Cの三位一体の上に成り立っていること、そしてこれが生み出す経済的な諸矛盾や戦争の危機を解消・回避する理念的な方途として、交換様式Dが想定可能であると論じている⁴。

3 交換様式AからB、そしてCへという継時的、発達的な見方が示されているわけではないことに留意されたい。どの社会構成体においても三つの交換様式が並行して存在していたことを、柄谷(2015: 15)は繰り返し述べている。

4 『世界史の構造』において、交換様式Dは、共同体による拘束から個人が自由であることを前提に、相互の経済的平等をも担保する互酬という形で現れる、と柄谷は述べる。交換Dは、未だ成立していない交換様式であるのだが、柄谷(2015: xiv, 12, 23)はフロイトが論じる「抑圧されたものの回帰」に依拠しながら、交換様式Dの出現と、それに伴う現在の社会構成体の揚棄が必然であることを論じている。

1-4:「贈与」の二つの意味：贈与交換（互酬）と純粹贈与（共同寄託／普遍宗教）

ここで、柄谷の論考の中で「贈与」がどのような意味で使われているのかを確認しよう。

柄谷は贈与を二種類に分けている。すなわち、互酬贈与と純粹贈与だ。互酬贈与は、マルセル・モースが『贈与論』において論じた贈与とほぼ同じものである。モース (2014: 101) は、贈与行為には「与える／受け取る／返礼する」の三つの義務があると考えた。この三つの義務により、共同体の間で事物その他が循環する。贈与という形式を採用しながら、事物が相互に移行し合っている場合、それは事実上、事物の「交換」である。モース／柄谷が単に贈与というとき、それは見返りを求めない無私的な行為というより、むしろ、双方の互酬的なやりとり、すなわち交換行為を意味する。柄谷はこれを互酬と呼び、交換様式 A に位置づけている。

他方、純粹贈与とは何か。柄谷の論考において、この語は少なくとも二つの文脈で用いられている。第一に、「共同寄託」を論じる文脈においてだ。共同寄託は、互酬と対を為す概念として説明されている⁵。柄谷 (2015: 66) によれば、共同寄託＝再配分は、遊動性（＝自由）を前提とするバンド社会に支配的な原理であり、これにより構成員相互の平等が実現される。

第二に、交換様式 D としての普遍宗教を論じる文脈においてだ。柄谷 (2015: 216) によれば、普遍宗教は、「交換様式 B の支配の下で交換様式 C によって交換様式 A を解体していった時点で、それらに対抗する交換様式 D として出現した」宗教である⁶。そして、柄谷 (2015: 228) は、「普遍宗教では『愛』や『慈悲』が説かれる」が、「交換様式という観点からみれば、それは純粹贈与（無償の贈与）である」と述べ、普遍宗教の核心として純粹贈与を見出している⁷。このように柄谷は、普遍宗教としてのキリスト教において、純粹贈与の発露が「隣人愛」に見出されると述べている。これは、純粹贈与が、互酬贈与と違い、贈与の対象となる相手の人格を問わずに為されることを示唆している。

このような柄谷の議論に基づき、本稿では以下、「贈与」という語を「互酬」、「贈与＝交換」の意味で用い、他方、無私的な性格を持つ「無償の贈与」という意味では「純粹贈与」の語を使用する。

5 「(...)互酬は、世帯内での共同寄託(再配分)から区別されなければならない。たとえば、数世帯からなる狩猟採集民のバンドでは、獲物はすべて共同寄託され平等に再分配される。しかし、このような共同寄託＝再配分は、世帯ないし数世帯からなるバンドの内部にのみ存する原理である」(柄谷 2015: 9)。

6 別の箇所では、交換 A, B, C の「否定」として交換 D が現れたと述べている (柄谷: 232)。

7 続けて柄谷 (2015: 229) は述べる。「すなわち、それ [=純粹贈与] は交換様式 A・B・C を超える D なのである。具体的にいえば、普遍宗教が目指しているのは、個々人のアソシエーションとして相互扶助的な共同体を創り出すことである。したがって、普遍宗教は国家や部族共同体を解体しつつ、それを新たな共同体として組織する。別の観点からいえば、普遍宗教は祭司階級を否定しつつ、新たな信仰集団を組織する預言者によって実現されるのである」。

1-5: 本稿の目的／方法／対象作品

以上の議論を踏まえ、本稿では、Старыгинаが提示した「贈与」の描写という問題意識を継承しつつ、作中人物の行動様式（原理）という新たな観点から短編『怪物』の再考を試みる。特に、「義人」の系列として論じられてきた主人公セリヴァンの特異性を解明することが議論の焦点となる。その際、分析／記述の道具として柄谷の交換様式論を適宜参照する。

1-6: 『怪物』のあらすじ

分析に移る前に、対象作品『怪物』の書誌情報とあらすじを確認しておこう。『怪物』は、マヴリーキー・ヴォリフ (1825-1883) により刊行が開始された子供向け絵入り雑誌『誠意ある言葉 (Задушевное слово)』上で、1885年に連載された短編小説である。本作についてレスコフは、「善良で、誠実な男」である「旅籠屋の管理人」を描いた作品と述べている⁸が、この男が主人公のセリヴァンである。

『怪物』は、農奴解放以前の中部ロシアの一地域を舞台に⁹、セリヴァンに関する虚像と実像の差異を巡って展開する。人々（民衆）はセリヴァンを妖術も使える恐ろしい盗賊と見なし、嫌悪／迫害していた¹⁰。しかし、実際のセリヴァンは、森の中で迷子になった「私」とその弟を救って自宅まで送り返したり、クリスマスの日、道中吹雪に遭った「私」とその伯母を自分の小屋（旅籠）に避難させた上、彼らが置き忘れた多額の金銭の入った手箱を返すべく、すぐさま彼らのもとを訪れたりしている。セリヴァンを「盗賊」「妖術師」と軽蔑していた人々は、とうとう彼の善良さを知る。以後、彼らはセリヴァンに優しく接

8 出版人のアレクセイ・スヴォーリン (1834-1912) に宛てた 1887 年 11 月 9 日付の書簡を参照した。書簡のより具体的な内容は、次のとおりである。「私には、半ば子供向けで、半ば大衆向けの短編『怪物』があります。三年前、ヴォリフの雑誌で「クリスマス物語」として掲載されたものです。これは、善良で、誠実な男 (мужик) である、「旅籠屋の管理人」を描いています。彼は、恐ろしい見た目で、人との関わりを嫌い、自分の妻—— 退役刑吏の娘—— を [人目につかないように] 隠しているという、ただそれだけの理由で、皆から泥棒あるいは盗賊とみなされていました。これは、実際にクロームイで起きたことなのです。この物語は大人にも子供にも、満足をもって読まれました (Лесков 1958a: 567)」。

9 本稿で分析の対象とした『怪物』をはじめ、レスコフの文学作品ではしばしば時代が「農奴解放以前」に設定されている。その意味を問うことは、レスコフの創作を解明する上で重要な課題である。だが、今回は「作中人物の行動様式の理念的／類型的な整理および作家の価値観との連動の可能性」を最重要課題として論じたため、時代設定の考察にまで踏み込むことが出来なかった。この論点については、機会を改めて考察することにしたい。

10 例えば作中第 2 章から、セリヴァンが「恐ろしい盗賊」として人々に認知／表象されていることが判る。「そのような恐怖が私を捉えたのは、私たちの家と私たちの住んでいる一帯が、セリヴァンと呼ばれていた、或る大変恐ろしい盗賊 (престрашный разбойник) であり、血に飢えた妖術使い (кровожадный чародей) の支配域にあると判ったからである (Лесков 1958a: 9)」。

するようになる。両者の間に温かな関係が築かれて、物語は終わる。

2: テキスト分析 (1): 現実のセリヴァンの行動

以下、『怪物』に描かれた作中人物の行動様式を分析していくが、注意すべき点がある。まず、1) 筆者は主人公セリヴァンの行動様式により深い関心を寄せるが、それは彼の行動だけを取り出して分析することを意味しない。むしろ、セリヴァンの特異性を明示する目的から、その比較対照項として、適宜その他の人物の行動も取り上げることになる。

次に、2) 作中で現実として示されていることと、虚構として示されていることを分けて考察する。本作は、語り手たる「私」が、幼少時の体験、伝聞、出来事を語るという形式で進行する。ただし、語りの中には現実のセリヴァン像だけでなく、「私」の見た「夢」や人々の「空想」の描写を通じて、架空のセリヴァン像も示されている。この点を受け、本稿では両者を区別して取り上げる。

最後に、3) 当面の課題を「柄谷の交換様式論を適宜参照しながら作中人物の行動様式を分析する」ことに設定し、これに取り組んだ結果、本稿では語りや視点の問題については必ずしも十分に考察を加えられなかった。このような作品論としての限界を自覚した上で、しかし本稿では、何よりもまず、ロシア文学研究において先例のほとんどない交換様式論の観点からレスコフの作品にアプローチ出来ること、またこの観点が作品外言説への接続をも可能にすることを、続く議論の中で示すことにした。

以上を念頭に、以下、現実として示されているセリヴァンその他の人物の行動を分析する。

2-1: 積み荷の下敷きになった商人を救出するセリヴァン（作中第4章）

セリヴァンがパン屋で奉公しながら生計を立てていたある時、彼の住んでいたクロームイに一人の男と娘、そして犬がやってくる。ボーリカと呼ばれるこの男は、退職刑事であった。彼らは宿を求めて町中の人々を訪ねるが、誰も家には通さない。やがて退職刑事と犬が死に、娘一人が残される。遂には娘も姿を消す。

娘の蒸発と同じ頃、セリヴァンも姿を消した。人々は消えた二人の行方を掴むことが出来なかった。パン屋を去った後のセリヴァンは、浮浪者となってどこかで暮らしていた。ある日、彼は荷馬車を引く商人の不運に遭遇する (Лесков 1958a: 13)。

(...) だが彼 [=商人 (купец)] は、渡しの上で上手く馬を誘導できず、積み荷の下敷きになってしまった。しかし彼は、見知らぬ浮浪者に助けられた。

彼は、その浮浪者が自分の知っている人物であり、ほかでもない、セリヴァンであると判った。

セリヴァンに救われた商人は、自分にしてもらった労苦に対して全く何も感じない人間ではなかった。最後の審判の時に、善行を為さなかったことの責任を負

わされることがないように、彼は浮浪者に対して善を為したいと思った (чтобы не подлежать на страшном суде ответу за неблагодарность, он захотел сделать добро бродяге)。

このあと商人は、「賃貸料として年に百ルーブル」を対価として、自分の持っている旅籠をセリヴァンに貸そうと提案する。セリヴァンは、商人の旅籠が収入の見込みのない場所にあると知っていた。だが、住処となる場所を手に入れられる貴重な機会だったため、彼は商人の提案に応じる。

以上の場面には、セリヴァンの行動が二つ、すなわち1) 商人の救出、2) 旅籠の賃貸契約が描かれているので、順に分析する。まず、1) の救出行動であるが、これは交換 A, B, C では説明がつかない。このセリヴァンの行動は、無私的な行動と考えられる。他方、2) の賃貸契約は、商品交換の一種と言えるから、交換様式 C の範疇で捉えることが出来る。

他方、商人の行動様式であるが、彼は、セリヴァンに対して返礼の意志を見せる(「自分にしてもらった労苦に対して全く何も感じない人間ではなかった」)。その上で実際に行ったのは賃貸契約の申し出である。ゆえにこれも、交換 C の範疇で捉えられる。

なお、商人の行動の動機(上掲ロシア語引用部)については、本稿 5-4 でもう一度言及する。

2-2: 森に迷い込んだ子供を助けるセリヴァン (第 10 章)

語り手「私」は、両親不在のある日、仲間と共にセリヴァンが暮らす森へスズラン狩りに出かける。だが、そこで「私」と弟は迷子になる。窮地に陥った「私」たちのもとに一人の男がやってくる。それはセリヴァンだった。ここで初めて「私」は本物のセリヴァンに接触する。ただし「私」は、自分を助けたその男がセリヴァンだと、この時はわかっていない。

「私」と弟は、男＝セリヴァンに保護され、肩に乗せられながら自宅まで送り届けられる。その際、彼らはセリヴァンの肩の上で心地よく時を過ごす (Лесков 1958a: 33)。

私たちは、彼の農民服に覆われたまま、彼の肩に乗っていた。(…) 私たちは快適だった。服は雷雨で濡れ、硬くなっていたが、それゆえにその下は乾いており、暖かかった。

「盗賊」と見なされ人々から忌避されてきたセリヴァンだが、実際には危害を加えるど

ころか、子供を保護する善良な男として描かれている。この行動様式を、交換 A から C の類型で説明することは難しい。セリヴァンは、ただ困っている子供たちを助けるだけであり、交換を志向しての行動ではない。無私性という点で、むしろ純粹贈与的な原理に基づく行動と捉えられる。

2-3: 商品交換に応じるセリヴァン (第 15 章)

やがてオリオールの寄宿学校に入った「私」は、クリスマスの時期に、伯母やその子供たちと共に帰省する。「私」の住む村に至るには、セリヴァンの住む森を経由する必要があった。途中、クロームイの町で休んでいると、少しずつ天候が悪化し始める。当地でクリスマスを過ごしたくない一行は、悪天候の中、村へ向かって森を突き進む。しかし、森は吹雪で視界が悪く、ついに一行は迷子になる。だが、折よくそこにセリヴァンが現れ、彼らに旅籠で休んでいくよう提案する。伯母は彼の提案を受け入れる。

その後、セリヴァンと伯母は、小屋の中で次のような会話をする (Лесков 1958a: 43)。

「さあ一刻も早く新しい蠟燭を、丸々一本頂戴」

「なんだって丸々一本必要なんです？」

(…)

「どっちにしても同じことです —— 蠟燭の代金は払います」

「もちろん払っちゃくれるでしょうがね、私は蠟燭を持っていないんですよ」

「私」の伯母は貨幣の力を前提に、蠟燭との交換を持ち掛けている。これに対して、セリヴァンもまた、彼女の商品交換の申し出に応じている。したがって、このセリヴァンの行動は、交換 C の範疇に位置づけられる。同時に、伯母が貨幣の力により商品（「新しい蠟燭」）を獲得しようとしている様子もうかがえる。伯母の行動もまた、交換 C の範疇に位置づけられる。

2-4: 「私」の伯母が置き忘れた大金入りの手箱を送り届けるセリヴァン (第 19 章)

隙を見て伯母は、子供たちと共にセリヴァンの旅籠から抜け出す。だが、慌てていたため現金三千ルーブルの入った手箱を置き忘れてしまう。セリヴァンの旅籠に寄ったことを、「私」の父、そして郡警察署長に話す中で、伯母はそのことにより気が付く。署長は、セリヴァンが盗んだに違いないと断言し、捜査に乗り出そうと動き出す。その時、息を切らしたセリヴァンが、伯母の手箱を抱えてやって来た。彼は忘れ物を返しに来たのだ。手箱がそのままだったことを確認すると、伯母は二百ルーブル紙幣をセリヴァンに手渡そうとする。以下はそれに続く場面である (Лесков 1958a: 50-51)。

セリヴァンは座ったまま、まるで何も理解できないというかのように、その様子を見ていた。

「取りなさい。お前に与えてくださったのだ」と郡警察署長が言った。

「なぜ？—— 要りませんよ！」

「あんたの所に置き忘れたお金を、誠実に守り抜き、送り届けてくれたからだ」

「それが何だっというんです？ 一体誠実ではいけないのですか？」

「なんという、あんたは... 良い人だ。あんたは他人の物を隠そうと考えなかったのだ」

「他人の物を隠すなんて！」セリヴァンは首を振って、付け加えた。「私には他人のものは必要ありません」

「だけど、そうはいつでもあんたは貧しい。—— 生活の立て直しのためにも取りなさい」伯母は彼を撫でた。

「取りなさい、取りなさい」私の父が彼に促した。「あんたにはそうする権利があるんだから」

「権利って何です？」

大人たちは彼に、落とし物を見つけて返したものは誰でも、その三分の一に当たる額を受け取る権利があるという法律のことを話した。

「なんという法律だ」と彼は答え、再び紙幣を握った伯母の手を押しつけた。「他人の不幸で儲けるなんて...。必要ありません！—— それじゃあごきげんよう！」

手箱を返しに来るといふセリヴァンの行動も、交換AからCの範疇ではとらえられない。セリヴァンの台詞から、彼が盗賊のように収奪する意図も、また見返りを得る意図も持っていないことが判る。彼はただ誠実であろうとして行動した。したがって、彼の行動は純粹贈与的な原理に基づいている。

他方、大人たちの振る舞いは、交換A的なものと考えられる。彼らにとってセリヴァンが置き忘れた手箱を持ってきたことは、ある種の贈与であった。ゆえに、今度は彼らがセリヴァンに返礼をしなくてはならない。それは、互酬的な原理に基づくものだ。

あるいはまた、彼らには二つの「負い目」が生じたと考えられる。それはすなわち、セリヴァンが、大金の入った手箱に手を付けることなく、急いでそれを届けてくれたこと、そして、実際には善人であったセリヴァンに対し、これまで偏見を抱き、時に彼を迫害（あるいはそれに加担）するような行動をとってきたことの二つである。そうした負い目を、彼らは、法的な根拠をも持ち出しながら、金銭の贈与によって清算しようとしているのである。その意味では、大人たちの行動様式を貨幣の力に依拠した商品交換（交換C）の範疇でとらえることも出来る。

いずれにせよ、大人たちの行動は交換の原理に依拠している。それは、この場面でセリヴァンが、交換を志向しない、純粹贈与的な原理で行動していることと対照的である。

2-5: 旅籠の客が増えて戸惑うセリヴァン (第19章)

金銭を受け取るよう言われたセリヴァンだが、結局それを受け取らずに立ち去る。翌日、この出来事が界限に知れ渡り、セリヴァンが恐ろしい人間ではなく、むしろ善良な人間だとわかった人々は、彼との交際を始める。また、後日「私」の伯母と父はセリヴァンを訪れ、彼に贈り物をする (Лесков 1958a: 51)。

一日経過し、この一件が町とその界限の人たちの知るところとなった。さらに二日後、父は伯母とともにクロームイへ出かけた。そして、セリヴァンのところに立ち寄り、彼の小屋でお茶を飲んで、彼の妻のために毛皮外套を残した。復路で彼らは再び彼を訪ね、さらに彼のために、お茶、砂糖、小麦粉の贈り物を持ってきた¹¹。

彼は全部丁寧に受け取った。しかし、気の進まない様子で (неохотно) 言った。「何のために? (На что?) いまや私のところに、もう三日になりますが、絶えず人が立ち寄るようになりました…。収入もあって (пошел доход) …, シチーも作りました。私たちは、以前のように怖がられていません」

セリヴァンが旅籠屋の主人として、おそらくは貨幣を得ながら(「収入もあった」)生活していることが判る。したがって、ここでの彼の行動は交換Cの範疇で捉えられる。

一方、伯母たちの行動(贈り物の贈与)については、前記(2-4)で成し遂げられなかった返礼(あるいは負い目の返済)の再試行と考えられる。もっとも、ここでは金でなく事物を贈与しているから、伯母らの行動は交換Aの範疇で捉えられるだろう。

2-6: 暮らし向きが良くなったセリヴァン (第20章)

手箱の一件以来、セリヴァンと界限の人々との交流は途絶えることが無かった。「私」の伯母も、終生彼と良い関係を保ち、彼の生活を助けようと努めている (Лесков 1958a: 52)。

11 「さらに二日後、(...), 贈り物を持って来た」の箇所は、ロシア語テキストでは「а через два дня отец с тетушкой поехали в Кромы и, остановясь у Селивана, пили в его избе чай и оставили его жене теплую шубу. На обратном пути они опять заехали к нему и еще привезли ему подарок: чаю, сахару и муки」となっている。

伯母が買った新しい領地に、人通りの良い街道沿いに建つ、良い旅籠があった。この旅籠を彼女はセリヴァンに、彼にとって良い条件で貸すことを申し出た。セリヴァンはこの提案を受け入れ、終生この旅籠で暮らした。(…) 私は、彼の状況が良い方向に変化したのを目の当たりにした。彼の家には平穏がもたらされ、少しずつ余裕も出てきたのだ。(…)

セリヴァンは、伯母の提案する旅籠を借り、以来生活状況が改善する。「良い条件」ではあるがあくまでも賃貸であるから、セリヴァンの行動は商品交換（賃貸契約）である。したがって、交換Cの範疇で捉えられる。

伯母はセリヴァンの生活に資するような提案を行っているが、無償の贈与ではない。物件の提案は商品交換的であるから、伯母の行動も交換Cで捉えられる。

2-7: 退職刑吏の娘を養うセリヴァン（第21章）

最後に、セリヴァンが退職刑吏の娘を保護した経緯が語られる（Лесков 1958a: 53-54）。

セリヴァンは、その心根の優しい善良さゆえに、町で死んだ退職刑吏の寄る辺ない娘の悲しい運命に、心を動かされた。この娘を保護しようとは誰も思わなかった。軽蔑すべき人間の子供だったからだ。セリヴァンは貧しかった。そしてその上、彼は刑吏の娘を、彼らのことが知られている小さな町の中で保護する決心が出来なかった。彼は、彼女には罪がないその生まれを、全ての人たちから隠さなくてはならなかった。そうでもしないと彼女は、慈悲深く、正しくあることができない人たちのひどい非難から、逃れることができなかつただろう。セリヴァンは彼女を隠した。なぜなら、彼女のことを知った人たちが彼女を侮辱することを、彼は絶えず恐れていたからだ。そして、こうした秘匿や不安が、彼の全身に伝わり、部分的にそれが彼に刻み込まれてしまったのだ。

ここでのセリヴァンの行動を、交換様式AからCで説明することは出来ない。セリヴァンは、自分が困窮しているにも関わらず、「寄る辺ない娘」を保護しているが、これは明らかに無私的な救済行動である。作中一貫してセリヴァンは、見返りの有無を問わず、また相手を問わず、手段としてではない、それ自体目的としての扶助を行う人物として描かれている。

3: テクスト分析 (2): 架空のセリヴァン像の位置づけ

ここまで、現実のセリヴァンの行動様式を分析してきた。セリヴァンには無私的な行動、言い換えれば純粹贈与的な行動が顕著にみられ、この行動様式こそが彼と他の人物とを分かち指標であることは、既にほとんど確かであろう。

とはいえ、既述の通り『怪物』には架空のセリヴァン像への言及もある。そこに見られる彼の行動様式については、どのように位置づけたらよいだろうか。この問題に対処する上で、『怪物』の主題的側面に言及する必要がある。そこで、作中第 20 章に目を向けたい。

3-1: 陰画的強調

語り手の「私」は、「宗教の第一の教え (первые уроки религии)」、具体的には「真実と慈悲の気持ちを愛すること (любить правду и милосердие)」を教えてくれた「卓越したキリスト教徒 (превосходный христианин)」であるオリョールの司祭に言及する。「私」が司祭にクリスマスの日の出来事 (セリヴァンの旅籠で起こったこととその結末) を伝えると、司祭は次のように答えた (Лесков 1958a: 52)。

君の空想、つまり蒙昧な人々の空疎な言葉 (пусторечие темных людей) に纏わりついてきた闇を、キリストが照らしてくれたのだ。怪物はセリヴァンではなく、君たち自身だったのだ。あるいはそれは、彼の善良な良心を見えなくするような、彼に対する君たちの疑いだったのだ。¹²

司祭の言葉をパラフレーズするならば、「対象の像の歪みは、対象それ自体に備わっている性質から生じるのではなく、むしろそれを認知する主体の側の歪みにより生じる」となるだろうか。「認知する主体の側の歪み」は、「暗い、無知の、盲目な」を意味する形容詞 (темный) により示唆されている。人々はセリヴァンを、例えば「悪魔と契約した妖術使い」として表象する。彼らの考えでは、セリヴァンは悪魔の力で富裕な商人、貴族、司祭を自分の旅籠へと誘い、彼らの金品を奪う残忍な盗賊であった (Лесков 1958a: 14-15)。だが、『怪物』において彼らは「目の暗い」主体と位置付けられており、そのような彼らの表象するセリヴァン像は、当然、実際のセリヴァンからは遠いものになる。

『怪物』におけるこうした架空のセリヴァン像の描写は、現実のセリヴァンの行動様式を陰画的に強調する要素として位置づけられるだろう。「空想」のセリヴァン像の行動＝「奪う／取る」と、現実のセリヴァンのそれ＝「無償で与える」(純粹贈与) が対比的関係になっ

12 ロシア語テキストは「Христос озарил для тебя тьму, которою окутывало твое воображение — пусторечие темных людей. Пугало было не Селиван, а вы сами, — ваша к нему подозрительность, которая никому не позволяла видеть его добрую совесть。」となっている。

ている点からも、そのように考えられる。

3-2:「私」の「夢」で描かれる善良なセリヴァン像の位置づけ

では、作中第7章で「私」が見た以下の「夢」の描写は、どのように考えたら良いだろうか (Лесков 1958a: 21)。

(...) 私が眠っている間、私とセリヴァンは最も心地よい調和のとれた関係にあった。私たちがいる森の中で、あちこちの秘密の穴が開く。そこには、たくさんのパン、バター、子供用の暖かい外套が隠されている。私たちはそれらを手に入れ、駆け足で、村中のなじみの小屋へと持っていき、窓際にそれを置く。誰かが見てくれるようにとノックして、私たちはその場を立ち去るのだ。

それは、おそらく、私の人生の中で最も素晴らしいものだった。だから、目覚めとともにセリヴァンが、再び私にとって、あらゆる善良な人間が一切の予防措置を講じてしかるべき盗賊になってしまうことを、いつも残念に思っていた。

夢の中のセリヴァンは、「盗賊」や「妖術使い」ではない。むしろ、「なじみの」村人のために事物を贈与する善良な姿も示されている。これは本稿の議論でいえば交換 A に近い行動である。もっとも、事物を贈与した後、セリヴァンたちは「その場を立ち去」っている点は注目に値する。これにより、贈与の痕跡だけが残り、誰がそれを行ったかが不明瞭になり、結果的に互酬性が生じにくくなっているからだ。その意味では、完全に交換 A の範疇で捉えられるとも言い難い。いずれにせよ、これは夢の中の描写であり、善良なセリヴァンの姿こそ描かれているが、現実の彼の行動様式を考える直接的な材料とはならない。

ただし、修辭的な表現が許されるならば、ここで「私」は見ないことによって、すなわち「対象の姿を歪ませる目」を「閉じる」ことにより、「夢」という形で逆説的に対象の実像を直観しているのである。

したがって、作品全体を視野に収めれば、この箇所が作品の主題的側面と呼応しながら、セリヴァンの善良さを間接的に表現する上で有効に機能していると言えるだろう。また、本作全体の論理に即して考えれば、セリヴァンの善良さは、純粹贈与的な原理に基づく彼の無私的な行動を通じて示されていることになるが、この夢は、後ほど示される実際の彼の行動様式を、ある程度予告したものとしても位置付けられるだろう。

4: テキスト分析に基づく考察

以上、『怪物』の作中人物の行動様式を分析した。結果、セリヴァンの行動には交換 C

的なものに加えて、純粹贈与的な原理に基づく無私的な行動が散見された。対して、商人(2-1)や伯母(2-3, 4, 5, 6)の行動は、交換AあるいはCの範疇で捉えられるような、基本的には交換的な原理でなされていた。

『怪物』の作品世界において観察される交換A(互酬)や交換C(商品交換)は同時並行的に存在しており、主人公のセリヴァンもまた、人々から隔絶した森に住んでいたとはいえ、そうした交換様式の中で生活していることは疑いようがない。だが、セリヴァンは、交換AやCでは説明のつかない、純粹贈与的な原理に基づく行動を何度も行っていた。そのような行動は商人や伯母には見られない。その意味で、この点こそがセリヴァンの特異性を規定しているのである。

まとめよう。主人公セリヴァンは、純粹贈与を基本原理に無私的な行動を取っており、まさにこの点で他の人物とは異なる肯定的な人物像、すなわち「義人」足りえていると考えられる。

5: 文学的創作と作家の価値観の連動

『怪物』の主人公セリヴァンには無私的な行動が散見された。では、このような形象は、レスコフの思想的文脈とどのように関係していたのであろうか。筆者の考えでは、セリヴァンは不意に発生した文学的形象ではない。それは、作家自身の価値観、とりわけキリスト教に対する作家の態度と関与しながら現れた。

5-1: 1870年代半ばのレスコフのキリスト教への態度

このことを考察する端緒として、1875年7月29日付のピョートル・シチェバリスキー(1810-1886)宛書簡の一節を確認しよう(Лесков 1958b: 412)。

(...) [今の] 私は『僧院の人々』を、それが書かれているようには書かないと思いますが、それでも [=書き直したとしても] それが私の気に入ることはないでしょう。代わりに今の私を掴んで離さないのは、ロシアの異端者(русский еретик)——すなわち、キリストの真理を探すためにあらゆる動揺を経験した後、それ [=真理] をただ自分の魂の中にのみ見出した、知的で、書物をよく読み、自由に考えることのできる、精神的なキリスト教徒(духовный христианин)——を書くことです。

長編『僧院の人々』(“Соборяне”, 1872)は、ロシアの聖職者を中心人物とした年代記風の作品である。本作品の発表から三年後の書簡の中でレスコフは、この作品への加筆の意思を、あるいは題材そのものの放棄の意思を仄めかす。そして同時に、自分の関心が「ロシアの異端者」である「精神的なキリスト教徒」に向いていることを表白する。

作家のこのような志向は、中編『世界の果てで』（“На краю света”, 1875-1876）によって一つの結実を迎えた。本作は1875年12月28日に『市民』誌上で初めて発表された。ロシア文学研究者の太田丈太郎（1995: 206）は「この作品でレスコフは、シベリアに送られたキリスト教宣教師と土着の民族との交流、キリスト教に比べて原始的であるとはいえず、キリスト教に劣らぬ土着民の宗教性を描き出していた。そればかりでなく彼は、キリスト教徒のみならず異教徒のためにも祈れという、トゥーロフのキリールの教えを引用していた」と述べている。本作でレスコフは、正教会の伝統や権威を纏った「キリスト教宣教師」と対立させる形で、「キリスト教に劣らぬ」「宗教性」を体得したシベリアの「土着民」——レスコフが言う「ロシアの異端者」「精神的なキリスト教徒」——の姿を描いた。1870年中頃よりレスコフは、文学的創作を通じて、正教会の伝統／権威への批判的姿勢を明らかにし始めたのである。

5-2: レスコフとトルストイ

正教会への批判的姿勢は、レスコフにキリスト教の中核的理念の再検討を要請した。結果、福音書に示されたイエスの教えが意識され始める。当然これは、同時代におけるレフ・トルストイ（1828-1910）の宗教的転回を無視するものではなかった。1880年頃よりトルストイは、従来キリスト教の精髓と見なされてきた奇跡や復活を否定し、代わってこれを実生活上の倫理体系として再構成することを試みた。無論、これもまた正教会の権威への意義申し立てであり、その点でトルストイはレスコフに一致していた。1883年10月9日付のスヴォーリン宛書簡において、レスコフは次のように述べる（Лесков 1958c: 287-288）。

(...) しかし彼 [=トルストイ] は正しい点を見えています。つまり、キリスト教は実際の人間の生き方に関する教え (учение жизненное) であって、抽象的なものではないという点、そしてキリスト教が、抽象化されたことで損なわれてしまっているという点です。「全ての宗教は良いものだ、それが祭司たち (жрецы) によって墮落させられない限りは」。私たちのところにあるのはビザンチン主義であって、キリスト教ではありません。トルストイはこれに対して堂々と立ち向かっています。トルストイは福音書の中に、「天国への道」ばかりでなく、「人生の意味 (смысл жизни)」までも指摘したいと思っているのです。(...) どうも、従来のキリスト教 (старое христианство) はただ長生きしただけで、「人生の意味」のためにもう何も為すことができないように見えます。

レスコフはここで、トルストイのキリスト教への態度に対し、明らかに賛同の意を示している。1870年代のレスコフにおいて、トルストイ的な福音書回帰の志向があったのかは、

実のところ定かでない。おそらく、その頃のレスコフは、正教会の伝統や権威を相対化するような、いわば元型的存在としての「異端者」「精神的キリスト教徒」を想定するに留まっていた。それゆえ、このような状況の中で出てきたトルストイの一連の思索は、レスコフの思考を補完するものとして機能したのであろう。レスコフは、1890年4月13日付のスヴォーリン宛書簡においても「福音書の教えを人間化すること (очеловечить) は、最も高潔で、全く時宜を得た課題なのです」(Лесков 1958c: 456) と述べている。「福音書の教えの人間化」とは、まさにトルストイが行ったことである。以上の書簡を総合すると、思弁としてではなく（「抽象的なものではない」）、具体的で実践的な行為（「実際の人間の生き方に関する教え」）を重視し、これを福音書の内に見出そうとするトルストイの方針が、レスコフにかなりの影響を与えていることが判る。

5-3: レスコフと「普遍宗教」

こうしたレスコフ／トルストイの志向は、本稿の議論に即して言えば、「普遍宗教」としてのキリスト教の志向と同値である。柄谷 (2015: 235-236) は、「アジア的な専制国家にあった祭司＝王という構造に組み込まれ」るとき、キリスト教を含む種々の源流思想は、普遍宗教としての資格を失うと述べている。レスコフが上掲の書簡において、「全ての宗教は良いものだ、それが祭司たちによって墮落させられない限りは」と述べるとき、作家は柄谷の指摘とほとんど同じことを直観しているのである。実際、『怪物』の中で「宗教の第一の教え」、すなわち「真実と慈悲の気持ちを愛すること」への言及があるが（本稿4-2）、これは「普遍宗教」の核心の説明と見なして構わないだろう。そして、主人公セリヴァンがその具体的実践として、純粋贈与を原理とする無私的な行動を幾度も行っていたことは、これまで見てきた通りである。

ここに、作家の価値観と文学的形象との連動を見出すことが出来る。レスコフに関して言えば、文学的営為と思索的行為は乖離するものではない。既に『世界の果てで』という作品が、文学創造と思索の相互関与を例証している¹³。1880年代においても例外ではなく、この時期レスコフは、文学作品を通じて自らの価値観を形象化する試みを幾度も行っている¹⁴。『怪物』のセリヴァンもまた、このような試みの中で形象化されたのである。

13 McLean (1977: 94) によれば、レスコフの文学に対する見方は、「功利主義的で教条的」なものであったという。晩年レスコフは、文学を、自分にとって正しく、かつ善いと思うことを表現できる手段として位置づけた。

14 レスコフは1886年から91年にかけて精力的に聖者伝の再話に取り組んでいる。太田 (1995: 203-205) によれば、そうした再話のうち、今日残った九作品に関して、「何れもキリスト教の勃興したヘレニズム末期から、キリスト教が異教世界に浸透しつつあった初期キリスト教時代にかけての、エジプト、シリア、パレスティナといった東方ビザンティン世界を舞台としている」、また、「(...) レスコフの関心は、正教会によって規範化された、公式の視点に立つ教条的奇蹟そのものには無い。かえって彼は原典に多少なりとも窺える反教権・反教會的な非公式の視点に注目し、それを大幅に強調する。これは程度の差はあれ、

5-4: 商人らと異なる原理のセリヴァン：普遍宗教としてのキリスト教への逆説的接近

以上を踏まえ、再び『怪物』に目を向けよう。本作のうち、キリスト教のイメージが明瞭に表れている個所が少なくとも二箇所あった。それは、「退職刑事とその娘に施しをするクロームイの町の人々」（作中第3章／本稿1-2）と「セリヴァンに助けられた商人」（作中第4章／本稿2-1）だ。改めて次の点に注意しよう。それは、クロームイの人々について、「彼ら [=退職刑事とその娘] のためではなくて、キリストのために」最低限の施しを行ったとあること、また商人について、「最後の審判の時に、善行を為さなかったことの責任を負わされることがないよう、(...) 善行を為したいと思った」とあることだ。

これらは確かに善行である。しかし、それらはセリヴァンの善行とは異なる。彼らは、目の前にいる人間ではなく、超越者（神）との関係を前提に行動する。言い換えればそれは、宗教的な契約関係に基づく行動であり、したがって交換を志向する行動である。彼らの行動を惹起するのはキリスト教的な価値観であるが、そこに依拠しているがゆえに、彼らの具体的実践はかえって形式的な次元に留まっている。

いまや、彼らとセリヴァンとの対照性は明らかだろう。テキストを分析する限り、彼はキリスト教的な価値観をほとんど有していない。少なくとも、キリスト教的救済を得る目的から行動しようという志向は、彼の行動描写その他からは読み取ることが出来ない。だが、そのことによって逆説的に、普遍宗教としてのキリスト教の核心（＝純粋贈与）を体現する彼の姿が立ち上がってくるのである。

以上、作中人物の行動様式／原理に着目することで、Старыгинаの観点からは不明瞭になるセリヴァンとその他人物の差異を明らかにすることが出来た。

6: おわりに

柄谷の交換様式論を手がかりに、レスコフ後期の短編『怪物』の分析を試みた。結果として、主人公セリヴァンに特徴的な行動が、交換とは異なる原理、すなわち純粋贈与的な原理に基づいたものであることを明らかにした。また、普遍宗教に関する柄谷の議論を参照することで、レスコフのキリスト教への態度を、普遍宗教としてのキリスト教への志向として位置付けることが出来た。以上の二点を総合し、本稿では、セリヴァンという文学的形象が作家の価値観と連動して現れ、かつ描出されたと結論する。

しかし同時に、残された課題にも気づかされる。本稿では、セリヴァンの行動原理として見出した純粋贈与を、専ら普遍宗教との関わりの中で論じてきた。だが、柄谷がこれを、遊動社会における経済的システムの一様態としても論じていた事実を軽視するべきではな

九作品の何れにも当てはまる」。太田は、その例証として、「キリスト教の側から軽蔑的に見られ」、また「社会的下層に置かれた」人間の祈りが「奇蹟を起こしたり、神の嘉するものであったりする」作品（『山』）や、「正統の教義からは異端視され、皆に軽蔑される」放浪芸人こそが、実際には「神の嘉する永遠に入るにふさわしい人間」として表象されるような作品（『放浪の芸人パンファロン』）を取り上げている。

い。『怪物』が発表された1885年は、大きく言えば農奴解放以降の資本主義勃興期の時代である。そのような社会的状況がある一方、レスコフは文学作品の中で、貨幣の力に依拠した商品交換とは異なる原理（純粹贈与的な原理）で行動する人物を「義人」として前景化させている。このような事態は果たして偶然に生じたものなのだろうか。そこには作家の——意図的にせよ、非意図的にせよ——価値観が織り込まれているのではないだろうか。そしてまた、当時の社会的経済的状況に対するレスコフの見解がいかなるものだったのか、その見解と彼のキリスト教への態度とがどのように関わっていたのか。以上の諸点を明らかにする必要がある。

参考文献

一次文献

Лесков, Н. С., (1956-1958) Собрание сочинений в 11 томах, Т. 8, 10, 11, М.: ГИХЛ.

二次文献

[キリル文字文献]

Горячкина, М., (1981) "Волшебник слова", Лесков, Н. С., (сост. Горячкина, М.С.) Повести и рассказы, М.: Детская литература.

Старыгина, Н. Н., (2017) "Дарение : от устойчивого рождественского мотива к сквозному мотиву в святочных рассказах Н.С. Лескова", Проблемы исторической поэтики, 4 (15): 38-58.

Столярова, И. В. (1978) В поисках идеала (творчество Н.С. Лескова), Ленинград: Изд-во Ленинградского унив.

[ラテン文字文献]

McLean, H., (1977) Nikolai Leskov : the Man and His Art, Cambridge: Harvard University Press.

[邦語文献]

太田丈太郎 (1995) 「レスコフの〈アポクリファ〉：説話の再話をめぐって」『Slavistika：東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報』11: 202-246, 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室

柄谷行人 (2010) 『世界史の構造』岩波書店（本稿で使用するの、柄谷行人 (2015) 『世界史の構造』岩波現代文庫）

マルセル・モース 著 森山工 訳 (2014) 『贈与論：他二篇』岩波文庫

ニコライ・レストフ 著 田辺佐保子 訳 (1987) 『森の怪人』（原題“Пугало”）金の星社